校長通信　2022 年度　第 9 号 12 月 21 日（水）

校長通信 Morifun

＜今年の漢字は戦＞

2022 年も残すところ 10 日を切りました。年齢と共に時間の経過が早く感じるのはなぜでしょうか。「チコちゃんに叱られる」でやっていたような気がしますが、それさえもすでに忘却の彼方に、という感じです。困ったもんです。「昔のことは覚えているのに最近のことはすぐ忘れる。」そんなものかと感じていましたが、確かにこの言葉を実感する今日この頃です。

さて、恒例の今年の漢字に選ばれたのは、「戦」でした。ウクライナ侵攻や物価高との戦い、直近のワールドカップの熱戦も選ばれた理由でしょう。思い出した、今年は冬季オリンピックも開催され、岩手県出身者も大活躍でしたね。それにしても「戦」という字は、なんとなくネガティブなイメージが付きまといます。それじゃあ自分にとっての漢字は何だったのかと自問しても、ピンとくるものがなかなか浮かんできません。そうだ、「成」はどうでしょう。民法の改正で、成人年齢が 18 歳に引き下げられました。本校の 3 年生諸君も成人を迎えた人が多いはず、大人への自覚はありますか。「成人とは、心身ともに成長して、一人前の人間になること」と辞書に載っています。高校というステージがその通過点となります。

そんな意識を少しは持ちたいものです。

＜金融講座＞

12 月 6 日と 13 日に、3 年生を対象に北日本銀行創立 80 周年記念共催講座として金融講座が行われました。

セクション 1 として、まず北日本銀行頭取の石塚様より、「金融の仕組みと銀行の役割について」というタイトルで、高校生が当事者意識を持ちにくい「金融」について、その仕組みと銀行（金融機関）の役割、自分たちの生活や社会との関わりについて学びました。

セクション 2 では、「自分の将来とお金の話」というタイトルで、野村ホールディングス株式会社の柏崎様から、充実した人生を送るために、将来のライフプランを考え、その実現に向けて準備することの大切さ、そして生活設計と資産形成に必要な基礎知識を学びました。

自立・安心・豊かな生活を送るためには金融リテラシーを身に付けること。お金の価値は信用で成り立っていて、信用がなければただの紙切れである。石塚様からは、ポジティブ（仲間を応援する心）、あきらめない、読書と会話の 3 つを大事にしてほしいというメッセージをもらいました。柏崎様からは、高校生になるまでに親がどれくらいお金が必要だったか知ってほしい、そして親に感謝の気持ちを伝えてほしい、という言葉がありました。生徒からは、「成人年齢が 18 歳となり、自分でお金の管理をしなければならないと改めて認識した。」といった感想がありました。

＜礼を正す＞

「時を守り、場を清め、礼を正す」ということばがある。教育学者である森信三先生が提唱した職場再建の三原則ということだが、もちろん私にとっては人生の三原則ということになる。もう少し具体的に記すと、「時を守り」とは、時間を守ること。この意味は相手を尊重すること。それにより自分が信用を積み重ねること。「場を清め」とは掃除をすること。掃除をすることの意味は5Kで表され、①気づく人になれる②心を磨く③謙虚になれる④感動の心をはぐくむ⑤感動の心がめばえること。「礼を正す」とは、挨拶をすること、返事をすること。挨拶の意味は、心を開いて相手に迫るということ、挨拶をすれば人間関係が良くなるということ。

「礼を正す」ということで言えば、高校時代の自分を振り返ってみると、残念ながら失格である。バレーボール部に所属していた私は、ユニフォームや練習着に袖を通している時は挨拶も割と率先して行ってはいたが、それ以外の場では自分から進んで挨拶をすることは希であった。こう見えても、バレーを引退するまで頭を五分刈りにしていなければならなかったせいか、どうも人前で声を出したり、進んで行動したりということが苦手であった。裏を返せば、自分に自信がなかったということかもしれない。今でも覚えている光景がある。ある冬の日、私はバスで学校に向かっていた。バスには私が通う高校の生徒だけでなく、一般の人も乗っており、割と混雑していた。途中である先生が乗ってきた。学年も違えば、授業も習ったことはない、でも確かに先生であることは分かった。私はバスの後ろの方に立っていた。当時のバスは前乗り前降りだから、その先生との距離は5～6m位だった。眼が遇った、挨拶しなきゃと思ったが、混雑していたせいか何か気が引けて、眼を逸らしてしまった。今思えば、他の乗客もいるのだから会釈だけでも良かったのに、何となく機を逸してしまった。こうなるともうダメだ。学校前のバス停で降りてから、普段は早足で歩く

自分だが、先生を追い越す時に挨拶をしなければと思うと、先生の背中を見つめながら、もう牛歩のごとくだらだらと歩いて校舎に入っていったのであった。その日は一日気分が晴れなかった。こんな些細なことを未だに記憶しているのだから、どこかでこの挨拶という行為が、自分の中ではうまく消化しきれないまま、今に至っているものと思われる。

時間がある時には、生徒ホールのところに立って、登校してくるみんなに「おはよう」の声を掛けるようにしている。元気よく返してくれる生徒もいれば、何となく目を合わせずにぼそぼそと挨拶していく生徒、たまには素通りしていく生徒とまちまちである。今日もとりあえず学校に来てくれたな、というのが一番の感想なのだが、時々自分の高校時代を思い出すこともある。そもそも挨拶をされて嫌だなと思う人は存在するのだろうか。もちろん、その時の気分で放っておいて欲しい、声をかけないで欲しいと思う時もあるだろう。でもそういうのは一時の感情であり、挨拶や返事は確かにそれだけで人間関係を良くしてくれる。学校はもちろん社会に出ても挨拶は基本中の基本、でもそれを意識しないで出来ることが肝要な点なのである。

さて、もう二つの原則である「時を守り」、「場を清め」の実践にもぜひ心を配って欲しいと思う。私たちは東日本大震災をはじめとする自然災害、そしてコロナ禍という、私たちの力だけではどうしようもない災厄を経験している。そういう状況下でも、共にみんなで支え合うことが苦境をはね返す大きな力になることを学んできた。非常事態に、誰かの指示を待つのでも、集団の同調圧力に身を委ねるのでもなく、自分自身の判断で適切に行動できること。他者を思いやり、コミュニケーションをとって解決策を見出していくこと。そのためにも、人生の三原則を実践し、人のこと、地域のこと、そして社会のことを真剣に想う心を磨いていって欲しい。新しい年を迎えようとしている今、まずは心を清め、来年こそはもっと素晴らしい年になることを願っている。

＜嬉しいニュース２つ＞

１つ目は**阿部銀蔵先生**が文部科学大臣表彰を受賞されたニュースです。文部科学省では、学校教育の振興に関し特に功績顕著な教育者の功労をたたえ、「教育者表彰（文部科学大臣表彰）」を行っています。今回は阿部先生の長年の本校における教育業績を称えてのものです。皆さんで祝福したいと思います。

２つ目は年明けに行われる箱根駅伝に、遂に本校卒業生の雄姿が見られそうだという、これまた素晴らしいニュースです。平成国際大学２年の**佐藤碧**さん（令和３年３月卒業）が、第99回東京箱根間往復大学駅伝競走関東学生連合チームの一員に名を連ねました。10月に行われた予選会で、惜しくも大学としての予選突破はなりませんでしたが、個人記録で選考されました。当日アクシデント等がなければ彼の雄姿が見られるはずです。２日、３日はテレビに釘付けです！

＜今年の一冊・今年の一本＞

今年はウィズコロナで様々なイベントも感染症対策をしながら開催されています。私が関わるバレーボールの大会も然り。ということで土日に大会に行く機会が増え、その分読書や映画の時間が限られますが、そんな中でも寸暇を惜しんで趣味の時間を確保するようにしています。

現在、77冊読了、75本鑑賞です。本の傾向としてはフィクションよりも新書関係が増えています。その中で面白かったのは、**『教えないスキル　ビジャレアルに学ぶ７つの人材育成術』（佐伯夕利子）**という人材育成に関する本です。「頑張らせることはできても、自分で考える力を育む文化が弱い日本のリーダーたちに送るバイブル」と書かれています。まさにその通りの本でした。自分のこれまでの指導法を見直すきっかけとなりました（バレーボールの指導には間に合いませんが、色んなヒントをもらいました）。それから**『デジタル・ファシズム　日本の資産と主権が消える』（堤未果）**これはデジタル社会に一つの警鐘を鳴らす本。その中にこんな記述がある。「紙の教科書と違い、液晶画面で読むものは、空間的な手がかりがつかみにくいため記憶に残りにくいこと、ネット検索で情報過多になり、考える前に検索してしまい頭を使わなくなること、そしてメモを取る能力と字を書く能力、そして内容を咀嚼する能力が落ちてしまうことだ。（中略）人間は記憶力をもとに新しい思考や創造的発想を生み出してゆくため、記憶力を優位にする「紙に触れ、手で書く」という行為を、おろそかにしてはいけないのだという。」テクノロジーの華やかさとスピードの裏で、失われていくものもあることを肝に銘じなければならないと考えさせられる一冊でした。

映画はアカデミー賞関係の作品が自分の上位を占めており、作品賞の『Coda　**コーダ　あいのうた**』やスピルバーグ監督がリメイクした**『ウェスト・サイド・ストーリー』**更には是枝監督の一応韓国映画となる**『ベイビー・ブローカー』**は見応えあり。勿論、相変わらずトム・クルーズがカッコイイ**『トップガン・マーヴェリック』**は映画としての出来も素晴らしい。イラン・仏合作の**『英雄の証明』**には想像力を掻き立てられた。一方、邦画では『LOVE LIFE』、期待以上に感動したのは**『線は、僕を描く』**（横浜流星と清原果耶の代表作になりそうな予感）**『ヘルドッグス』**はかなりの拾い物。邦画もここまで来たかという感じ（勿論いい意味で韓国映画に追いついてほしい）。本も映画も別の国や時間軸そして空間へと連れていってくれるし、想像力が豊かになる。こんなことをしてしまったらどうなるのか、自分が主人公だったらとか、色々考えるきっかけも与えてくれます。ぜひ皆さんもこの冬休みに本でも映画でも味わってください。